



第14号：平成27年6月10日 乾山 —— 1

現代の京都でも、商家の次男や三男は家の家業を継がず文化的な職業を選ぶことが多い。これは昨日今日のことでなく、江戸時代に遡る伝統的風習と云える。乾山もその例に漏れず、兄・光琳と同じように芸能の道を選択した。実家の呉服商雁金屋は長男が継承したのだが破綻してしまったので、陶芸に生きざるを得ず、初め野々村仁清から作陶を学び、御室に窯を作り、二条の丁子屋町で乾山焼と呼ばれ繁盛した。後に上野寛永寺領の入谷に窯を構え、活躍し江戸で没している。

光琳が絵を描き、乾山が焼いた作品が多く、仁清から受け継ぐ色彩豊かな作品も残されている。

同じ兄弟であってもそれぞれ性格が異なり、光琳のようなはでな女性関係を乾山に求めることはできない。つまり華やかな彩りの光琳作品に対して本図に見られるような図柄の絵付けが乾山の性格を物語る。花唐草に囲まれた唐子を支える下部の文様は単純な列を作る縦線に見えるが、乾山は漢字の「山」を用いたのではなかろうか、と考えてしまう。とすれば、この唐子は山また山の奥、深山に住む仙人に見えてくる。中国の神仙思想に、乾山は興味を持っていたのではないだろうか、と想像の環が広がる。

